

附属図書館と学生——『概要』刊行にあたって



◇国立大学の法人化は附属図書館の変化と、図書系職員に意識改革を求めてやまぬ。図書系職員も法人化に伴う「脱皮」を説明しなければならない。『概要』刊行の目的も旧来と同じはずはあるまい。

◇電子化は今後ますます勢いで進み、享受者である教員は、図書館側が提起する費用増加への対応には無関心なまま、利便性を「熱心」に議論するだろう。一方で、附属図書館のトピックである「北海道大学学術成果コレクション」(HUSCAP) (11頁)の、2006年6月21日現在の登録者は333人、登録論文は7,901、ダウンロード数は163,967である。ここでは、享受者である教員は研究者として機関リポジトリ構築者たることを期待されている。附属図書館と教員との新たな関係の創出である。

◇後回しにされそうな学生の学習・教育支援と附属図書館との関わりについて敢えて述べておく。

北海道大学附属図書館「中期目標」には、実現すべき目標として「教育研究支援の質の向上」「業務運営の改善及び効率化」「財務内容の改善」「社会への説明責任」などを掲げている。それらをやや具体化した冒頭に「学生の学習・教育に必要な図書館資料の充実」と謳ってあることは、格別に興味深い。『概要』の「沿革」には、「明治9年8月札幌農学校開校、講堂に「書籍室」を設ける」とある。講堂に「書籍室」とあるからには、附属図書館の起源が「学生の学習・教育に必要な」書物を備える機能に拠っていたことは多言を要しない。

3年前に取り纏めた『附属図書館の現状と課題——自己点検・評価報告書』は、「現状と課題」を総合的に、かつ率直に述べ、「図書資料の選定」の課題に「学生用図書選書体制整備」「図書選定小委員会見直し」「選書ガイドライン策定」「学生用新刊書・教養図書整備」を掲げている。僕なりに換言すれば、何よりも図書系職員の専門性を発揮して、学生が手に取りながら利用できる開架図書の充実を図るということだ。昨年度開架閲覧室利用者総数84万人中、学生は50万人(60%)、大学院学生は13万人(15%)を占めた。附属図書館の最大の利用者は学生である。「利用状況」(20頁)の数字は、雄弁である。

◇附属図書館では、昨年度の総長重点配分経費を得て、北分館を改修した。全学教育施設は既に改修が済み、情報教育館や「放送大学北海道学習センター」は新設になって日が浅い。北分館は、空調は騒音に等しく、壁・床も痛みが激しく、隣接する施設に比していかにもみすぼらしかった。工事後には閲覧室の印象は一変した。天井・壁を塗り替え、鉄製書架に木製の側板を張り、部分的だが机に間仕切りを施した。空調音もごく低く抑えた。閲覧室全体が柔和な雰囲気となり、隣接施設と調和したものとなった。旧閲覧室を知る2年生達は「きれいで、静かになったので、とてもいい」と語っている。今年度から学習の質を高めるべく履修科目数に制限を加えたことも重なって、2006年4月の北分館利用学生数は53,329人(昨年4月は31,733人)、1年生だけだと12,661人(昨年4月は7,868人)に達した。「沿革」(3頁)の1行に満たない「北分館閲覧室(1階～3階)を改修」なる記述には、膨大な情報が凝縮されているのである。

◇大学附属図書館のあり方について、対外的な説明責任を求められていることは大方の理解だが、内部的な説明責任の方が遥かに重要で困難な課題であろう。附属図書館にかかわっている職員が自分の部署やトレンドだけでなく、大学という教育機関に附属する図書館の基本的役割である教育の機能について、それぞれの言葉で話せるようにならなければならない。学生と教員のいずれも附属図書館にとって重要な存在だが、大学に授業料を納入している利用者と、大学が給料を払っている利用者と、どちらがより重要な存在か、これはそう難しい問いではない。

北海道大学附属図書館長
逸見勝亮